

[制作記録]

## 野焼きによるテラコッタ彫刻

石田陽介

塑造の制作は、まず粘土を用いて原型を作り、そこから石膏などで雌型を取り、その雌型に石膏や合成樹脂などでキャストインして作品に仕上げるのが通例である。私自身も長年合成樹脂による成型（FRP）で多くの作品を手掛けてきた。この方法は軽くて丈夫で、慣れれば簡便な技法ではあるが、イミテーション的な感覚が付きまとい、制作（過程）と作品（結果）との間に少なからぬ違和感が生じる。そこで、近年はテラコッタ技法を用いて過程と結果が少しでも近づくように努力している。

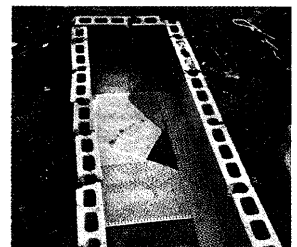
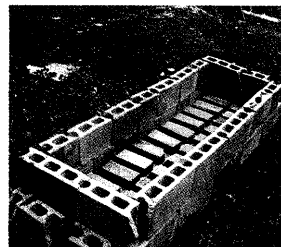
テラコッタの技法においても、雌型を取りそこに粘土を張り込んで像を作る方法（型押し）と、原型自体を分割し中をくり抜いていく方法がある。前者は粘土の厚みが一定になり、焼成の成功率も高く、万一焼成に失敗しても再度像を作り直すことができるが、制作時の粘土のタッチなどは甘くなる。後者は作り直しがきかないのでリスクはあるが、制作時の痕跡を直接感じ取ることができる。

また焼成方法についても、電気窯やガス窯などで温度を管理しながら焼けば成功率は高くなるが、きれいに焼き上がり過ぎるため面白みという点では少なく感じる。一方「野焼き」では温度の管理が難しく、作品を損ねるリスクを伴うが、粘土の滋味のようなものが生まれる。

今回紹介する作品は雌型を用いてはいるが、素材感をできる限り活かすために、原型自体をくり抜いてから再度型に押しつけるという方法を取り、焼成は「野焼き」によって行った。この野焼きは「縄文土器づくり教室」での体験をベースに自分なりにアレンジしたもので、特別な道具を用いず、できるだけシンプルなかたちで行うよう心掛けた。

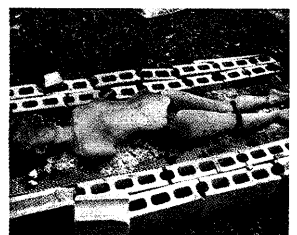
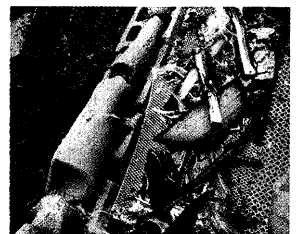
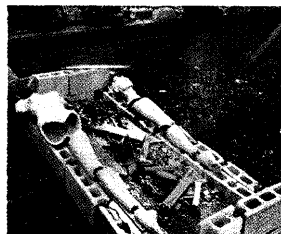
### 1. 窯づくり

コンクリートブロックで囲いを作り、空気の通りをよくするためにレンガを並べ、金網を敷いた。



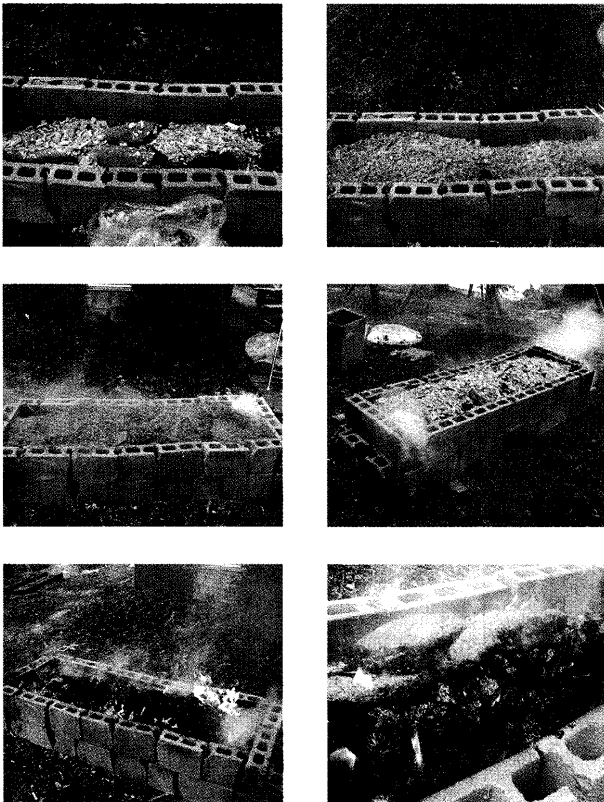
### 2. あぶり

徐々に温度をあげるために火から離して全体があたたまるよう方向を変えながらあぶる。粘土が煙を吸い込み、温度が上がってくると表面の色が変化する。



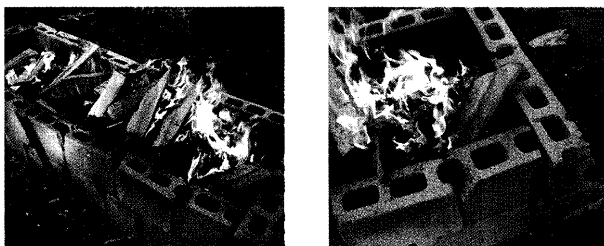
### 3. 焼成①

木彫制作の際にできた「木っ端」で像全体を覆い、燻すように焼いてみた。



### 4. 焼成②

小さいものであれば燻し焼きだけで充分だが、今回は大きい作品であるため温度が充分上がり切ったか不安が残ったので、さらに薪を用い高温で焼き上げた。



### 5. 焼き上がり

薪が燃え尽き、温度が下がるのを待った。朝から始めた「野焼き」もじっくり時間をかけたので、焼き上がった頃には日も落ち、あたりはすっかり薄暗くなっていた。灰の中から現れた像は火に生命を吹き込まれたような不思議な存在感があった。



人間が古代から営々と続けてきた「ものづくり」。我々のDNAにも深く刻み込まれているのだろう。「野焼き」に尽きせぬ魅力と喜びを感じるのは、土と火という現代人が忘れかけているもっとも原初的な素材が、「ものづくり」たる人間の芯を直接揺さぶるからに違いない。

(いしだ・ようすけ 彫刻)



afloat '06 (第38回 日展出品)